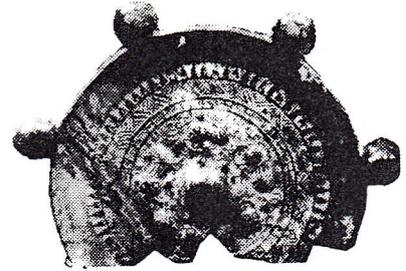


文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七 鈴 五 獸 鏡

創立 40 周年 記念号

大和町文化財保護協会 創立四〇周年を迎えて

会 長 佐 藤 光 一

本会創立四〇周年を迎えるに当たって、草創期の先輩たちのご努力と熱情を改めて感得し、決意を新たにしたいと思います。

岐阜県では、昭和三八年（一九六三）度の置県百周年記事業の一つとして岐阜県史の編纂が始まり、それを契機に、県下の市町村史編纂ブームも起きました。

わが大和町（当時大和村）では、昭和四四年（一九六九）九月、山下村長の要請により、村史編集準備会が設けられ、さらに同年一月には編集委員会が結成され、村史の編集が始まりました。

県・市・町村史の編纂が進むにつれ、必然的に「文化財は国・地方の歴史や文化を正しく理解す

るために欠くことのできない尊い文化遺産である。我々は郷土の文化財を守り、後世へ伝えるとともに、それを基にして、新しい文化を創造発展させなければならぬ」という機運が醸成されました。

◎昭和四五年 県内各地で独自の立場から文化財保護協会結成の動きがあることを察知された県教育委員会社会教育課は、七月八日、これらを調整し、全県一本の協会設立を促すため、代表者一〇名を招集して設立準備会を開催されました。

・九・二六 同課は各市町村教育委員会に、協会設立のための発起人推薦を依頼しました。大和村では、村史編集委員長の



「文化財やまと」創刊号

野田直治氏が発起人に加わり、設立に参画しました。
◎昭和四六年
・三・一七 岐阜県文化財保護協会設立総会開催。
・四・一日 大和町文化財審議会が設置され、昭和四九年より、村内史跡・絵画・彫刻・工芸品・考古資料・歴史資料・天然記念物等が次々と指定されることになり、現在では、町内に国・県・市指定文化財が実に一三四件に達しております
・一〇・一 県協会の発起人を務めた野田直治氏は、村史編集委員らと協議を重ね、この日を期して、大和町文化財保護協会を設立しました。

旨の周知をはかり、会員の増加に勤められました。
◎昭和五二年
・七・二九 会員数が八〇名に達したのを機に、岐阜県文化財保護協会大和支部が結成されました。
支部設立総会では、規約制定、

七鈴五獸鏡

岐阜県指定重要文化財
時代 六世紀中ごろ（約一五〇〇年前）
管理者 徳永多賀神社
鏡は、写真のように、全体の四分の一が欠損している。白銅製で、鏡面は光沢のある灰色を呈しており、文様のある面は外から鍔刃文帯、連続三角文帯、偽銘帯があり、その内側に小さな五つに乳と形状不明な五獣を配している。直径一一・四センチ、周囲に七つの鈴があつたが、そのうち三個が欠けている。鈴字は小石で、振るとかすかな音を立てる。

役員選出、五三年度事業計画及び予算の承認、南濃町円満寺住職で、県保護協会の代表者の一人石川良宣氏を招いての記念講演「仏像の拝み方」など、熱のこもった船出となりました。
・三・三一 会誌「文化財やまと」が創刊され、村（町）内文化財の紹介、地元の文化財をはじめ、町・郡（市）・県内外の文化財の見学・研修など、会の活動の様子の報告に力を入れてきました。

発会当初から、会の役員は、文化財保護審議会・村（町）史編集の主要メンバーを兼ねていたことから、「広報やまと」を活用して、村（町）内の文化財

を村(町)民に紹介することができました。

◎昭和五四年六月、東氏館跡庭園が発見され、同六年六月一日に国の名勝に指定されました。同六年第三次大和町総合開発計画で、「古今伝授の里」づくりが掲げられ、平成五年七月一日に「古今伝授の里フィールドミュージアム」がオープンしました。同七年の第四次大和町総合開発計画に「文化財収蔵・展示館」の建設が加えられ、一〇年もの曲折を経て建設が完了し、一五年一月一八日にオープンしました。その時の喜び、感動を形であらわすために、会として「大和町歴史年表」(掲示用)を寄贈いたしました。

その間、一三年一〇月、平成七年に作成された『大和町の文化財』の図録を底本に、その後



指定された物件を増補して、ホームページ形式にデジタル化した(上掲写真)。現在インターネットで「大和町の文化財」を検索すると、大和町の文化財の全容を画像と解説文で閲覧することができ、さらに一五年に「大和町文化財マップ」を作成し、展示館に備えました。今年はこちらに手を加え、図面上の画像にポイントを加え、

と、まず、英語で件名が現れ、選択すると、拡大画像と解説にリンクできるようにします。

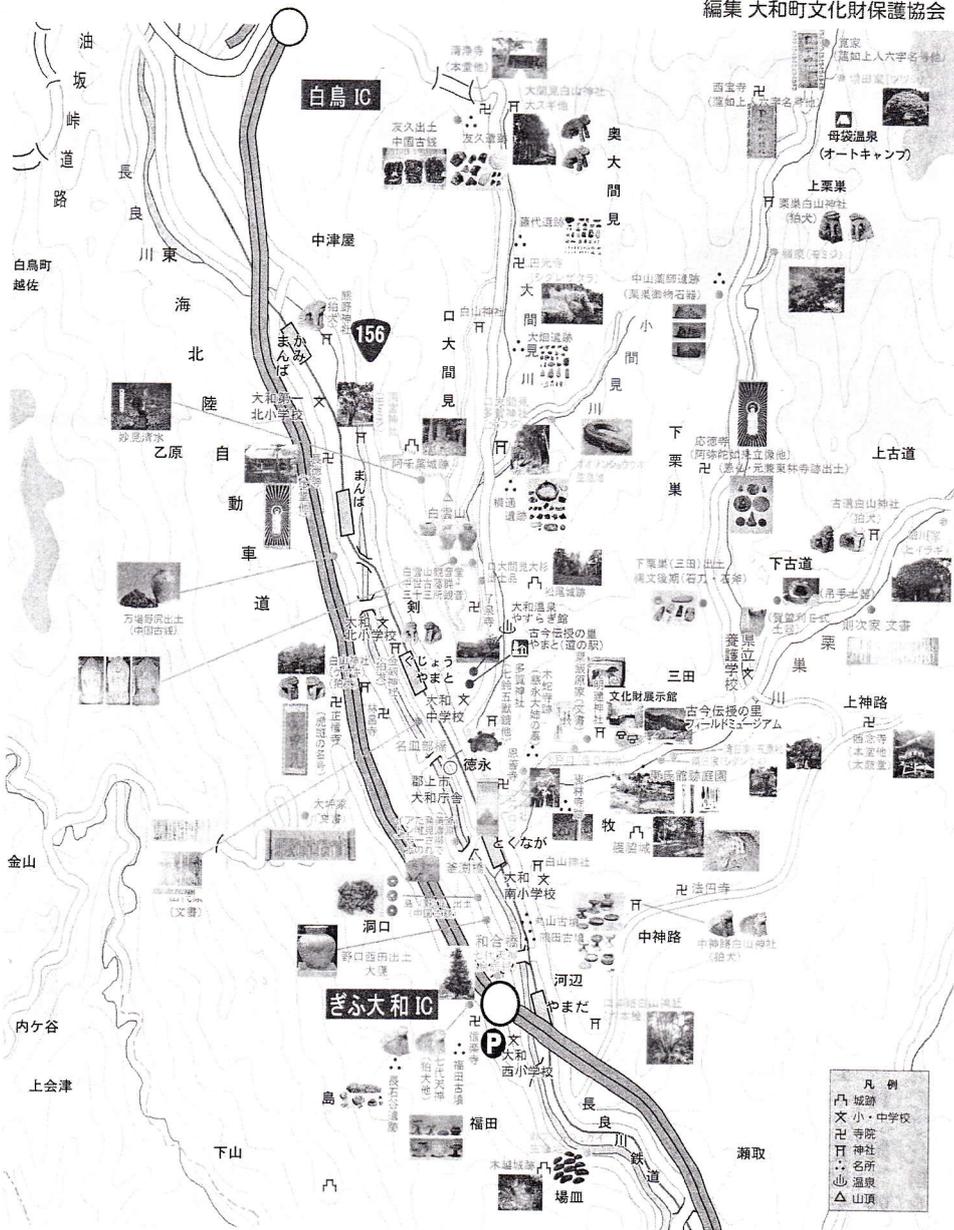
創立四〇周年記念事業の第一段として、昨年度は傷んだ文化財標柱一七本をアルミ製の標柱に建て替えました。

記念事業の本命は東家文書七四件一〇八点のうち、古今伝授及び東常縁に関する書き物のデジタル化です。完成ののち、独自のホームページを開設し、その他の文化財と共に、公開して広く自由な閲覧に供します。

創立以来、会員の皆さんの熱意に支えら

大和町文化財マップ

編集 大和町文化財保護協会



れ、数々の成果を挙げてきましたが、会員数は、平成一〇年の一七七名をピークに漸減を続けております。私たちの地道な活動を町民の皆さんに周知し、ご理解を取り付け、一人でも多くの町民の皆さんに活動に参加していただけるように取り組むこ

とも、記念すべき今年の大きな課題であると痛感しております。思い起こしますと、創立当時、会長以下三〇歳代、四〇歳代の働き盛りでした。現在は会員の平均年齢が七〇歳を超えています。そのことから考えて町内の心ある若い人たちにこの活動の

重要性を訴え、ご理解ご協力をいただくことが、文化財保護活動をよりよく継続・発展させて行く最良の方法であると考えます。この事を念頭に置き、骨身を惜しまず啓蒙活動に取り組みなければならぬと、決意を新たにしております。

創立三〇年から四〇年へ
文化財保護協会これまでの足跡

本川 喜代士

◇私と四十年前の東北

盛岡から車で真東に太平洋に向かうと約三時間で宮古の浄土ヶ浜。

ある名僧がこの世のものとも思われぬ奇岩奇勝に極楽浄土のようだと名付けたとか。

そのやや北が田老町、その代表的な景観が三王岩。その傍の断崖の上に国民宿舎「三王閣」があり、長い階段を下りた海岸が文字通りの白砂青松、陸中海岸の代表的な景勝地でした。ただちよつと気になったのは大きな堤防の関所のような門でした。それを潜らないと海岸に出られなかったのです。その自慢の堤防は今回の東北大震災には役立ちませんでした。

立四〇年とのことですが、私の四〇年前は、東北地方の素晴らしき、日本に生まれた幸せをしみみ味わい心躍らせていた時期です。東北の魅力は海岸だけでなく、十和田湖、八幡平、男鹿半島、平泉などが中心でしたが、牡鹿半島や、碓石海岸、後に井上ひさしの小説で有名になる吉里吉里の浪板海岸では、まだ小さかったうちの娘たちは喜んで水遊びしたものです。沿岸を走る四五号線は当時はまだ舗装工事中で砂ぼこりの中の真夏のドライブは大変でしたが、リアス式海岸の断崖絶壁や海の青さの美しさなど、今でもありありと目に浮かびます。

◇文化財保護協会発足

昭和四六年大和村文化財保護協会が発足した。

「文化財やまと」の創刊号からコピーさせていただく機会を得ました。支部長として最初にお骨折りにいただいた野田直治さん

を始め、畑中浄園、森藤幸、有代信吾さんらのご努力で、会報を年二回も発行して、その中で村指定の文化財の紹介をされたり、皆さんお得意の短歌・俳句の取りまとめなど、活躍が手に取るように偲ばれます。初めはまず地元で文化財見学、篠脇、阿千葉、松尾城、白山神社、七大神、金剣神社等々。場所を広げて、明宝博物館、星宮神社、長滝若宮家、石徹白神社、そして一乗谷朝倉城跡まで見聞を広め、名古屋、岐阜、京都、奈良各博物館の催しに参加した旅でした。皆さん真面目な方が多く、畑中浄園さん、河合俊次さん、高橋義一さん等は当協会には欠かせない方々でしょう。

◇古今伝授の里大和誕生



東氏館跡庭園発掘状況

大和町にとって幸運だったことは、昭和五年七月から三年にわたって東氏居館跡の発掘が行われたことです。

森藤さんから土松さんにバトンが渡り、平成四年秋、協会創立一五周年記念事業で、大和町内指定文化財展示会が開催されましたが、古今伝授の里「大和町」誕生の瞬間でした。このために生涯を捧げたと言えるのが土松新逸さんだと思います。

◇活動は国内・国外へ

その文章がよかったという訳でもないでしょうが、土松さんの次に会長に推されたのが佐藤さん、説得のために町会議員を始め何人かが佐藤宅を訪れ、仕方なしに承諾させられたとか、御本人のつぶやきです。なるようにしてなった、私たちには「ヤリとさせられるシーンですが、そんな感想を述べたら佐藤さんにはおおいに不満でしょうか？」

平成元年一月末、大和町文化財審議会のメンバー七名が、千葉県の東庄町を訪れたり、平成六年九月には畑中、土松、高橋三氏が、北京・西安を訪ねて中国旅行記が掲載されてお

るのが現会長の佐藤光一さん、二五号のページにわたって記されている暖かい文です。

り、浄園さんは九年三月、中国の洛陽・竜門石窟等を再訪、平成七年七月には、残留軍人と満州鉄道職員の本ハトイ村墓参シベリア紀行記を詳細に載されており、私には全然面識のない方でしたが、ついつい頭が下がってしま

た。郡上高校教頭を最後に短大の英語の講師を務めるかわら、NHK学園古文書の通信教育で古文書の「生涯学習一級インストラクター」の資格を取

うそんな人となりました。

「郡上郷土史研究会」その他いくつもの団体に所属、県内の市町村史はほとんどを集められ一般の蔵書の量を壊すほど。先生のお宅を伺うたびに圧倒さ

「文化財やまと」既刊三五冊をざっと通読して気がつくのは、最後のページ「編集後記」を一番多く手掛けられる居られるのは畑中浄園さんです。その浄園さんの追悼文を書いておられ

た。郡上高校教頭を最後に短大の英語の講師を務めるかわら、NHK学園古文書の通信教育で古文書の「生涯学習一級インストラクター」の資格を取

ました。歴史研究にも熱心で

ました。歴史研究にも熱心で

れるのは岩波新書の冊数です。日本中の図書館や書店を歩いてもあれだけ揃っているのは見たことがありません。でも私が一番感心させられるのは先生が毎日歩いておられること。毎朝の日課は雨の日でも一日でも欠かさないと、一〇年以上続いているそうです。先生の笑顔がいつまでも若々しいのは、そんなことが原因でしょうか。

ライフワークは古文書のデジタル化
七〇歳から始められたパソコンで郡上藩書騒動の古文書のデジタル化をライフワークにしている佐藤さんによって、文化財にとっても画期的な進展につながりました。三〇周年記念で町内指定文化財のCD化が完成、記念試写会も行われました。この年の一泊旅行から会員にさせて頂いた私にとって、文化財最初の旅行は信州長野でした。お城は少ない国宝の松本城、前山寺三重塔、安楽寺の八角三重塔、川中島典厩寺、豪商の館、田中本家博物館等の見学でしたが、一番の魅力はバスのガイドさんでした。日本アルプスをわが家の庭の如くに熟知しておられ、流暢な説明に魅了されたのは私だけではありませんでした。

た。ガイドさんの名前をはっきり覚えさせていただきました。「旅行の感想文を出してください」私に出来ることならと手紙文の形で採否を任せたら、「長野県文化財視察に参加して」こんな仰々しい題名で採用されてしまいました。以後は自分で題名をつけ、ない頭から絞り出して文章作りに励んでおります。

次のは文化財始まって以来の長い旅になりました。八幡から山口県小郡まで約千キロの行程は、費用と距離とで一泊だけでは限度に近いとか、結局一人だけの運転手で通し、行き帰りの昼食はバスの中だったと思います。私には親類の慶事が重なり東京近辺までの約千キロの行程が追加され、更なる負担となりましたが、その後の生き甲斐が変わるほどの思い出深い年になりました。この年はイラク開戦の年です。「ブッシュさん来て見て欲しい」広島のパラントアの説明員の姿が目につかびます。オバマさん広島に来るか知らず？



瑠璃光寺五重塔

い国宝の虎渓山永保寺への拜観。心字池に架かる無際橋越しの観音が周りの紅葉の見事だったこと。

文化財収蔵・展示館オープン

世界中の目がイラクに注がれている頃、日本では町村合併がはやっておりまし

写真です。一番の印象は瑠璃光寺の五重塔です。熱心に撮影されている佐藤さんの後ろからカメラに収め、遠方からの眺めだけに止めました。奈良の薬師寺東塔よりも時代を感じさせる趣がありました。もう一度行ってみたい所第一号です。この時は皆さんのご厚意が特に目立ちました。原爆被災状況を語られた有代和夫さん、長いバス旅を飽きさせなかつた渡辺明夫さん、超人ドライバーととも添乗員の山本さんも大変活躍してくださいました。この年の秋は岐阜県で数少な



収蔵・展示館竣工式

大和町も、平成一六年三月一日から郡上市に変わりました。その前年、一五年一二月一日「文化財収蔵・展示館」がオープン致しました。最後の町長旗勝美さんのご尽力のお蔭でしたが、そこに至るまでの関係者のご努力は並大抵のことではなかつたと思います。要望の取りまとめから働きかけ、展示レイアウトの取り決めから展示物の細かな作業まで、オープンが決まってからの急な日程の変更など、佐藤会長を始め関係者が寝食を忘れるほどの作業の連続だったと聞きます。大和町文化財保護協会はオープンの式典で感謝状を授与されました。

郡上市誕生最初の旅行

郡上市になっての最初の旅は親鸞聖人越後流罪の行程を追った初めての、二泊の旅になりました。親鸞聖人の七不思議を追ったのですが性宗寺、常敬寺、居多神社など読みにくい社寺、信じにくい七不思議がある反面、各地での桜並木の見事さは新潟県を見直すほどでした。この直後に新潟は災難に遭遇します、水害と中越地震、そして前年に訪れた多治見の永保寺では本堂の消失、こののち訪れる輪島でも地震が発生と不思議な因

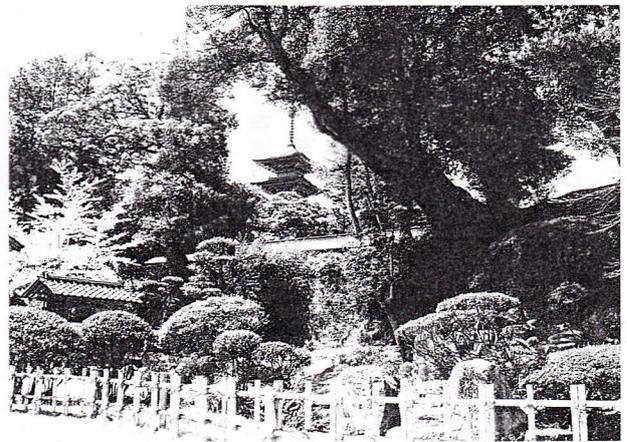
縁が続きました。中越地震では縁戚関係の旅館が大打撃を受け、二年後に再開までのニュースがNHKで報じられたりしましたが、私どもでは仮設住宅におかみさんの激励と再開お祝いの再訪等うれしい後日談もあります。このときの新潟旅行記は大失敗をやらかしてしまいました。

ガイドの後藤さんのサービスマンで田中角栄邸の前をバスが徐行したので、表札をじっくり見せてもらいました。私は田中直紀の表札を旧姓の鈴木と書いてしまったのです。帰ってから渡辺明夫さんにビデオを見せてもらい間違いを発見しました。今のビデオではバスの中からの撮影でも表札の字がハッキリ撮れるのです。サー大変私はウソを書いてしまいました。印刷に出してしまい校正はできませんでした。その時佐藤さんはどうしたか？校正ミス一字を含め間違った文字は全部で三字でした。あの忙しい佐藤さんができあがった四〇〇部を一部一部ペんで訂正を始めたのです。興味のある方は「文化財やまと」二九号を見てください。私の恥ずかしい苦々しい大失敗の痕跡です。

古今伝授の里フィールドミュージアムのシンボル東氏館跡庭園で知られる東家の当主東胤駿（たねたけ）氏が、平成一七年二月一九日亡くされました。大和町にとっては大事な方の永眠でした。

◇能登の旅

この年の文化財の一泊旅行は越中・加賀の文化財を訪ねる旅でしたが、私にとっては、三二年ぶりの能登半島でした。当時は世田谷の東名高速のインター近くに住んでおりましたが輪島・金沢の北陸路は魅力的な観光ルートでした。サーフィンや潮干狩りで連想する柔らかい砂浜がすべての関東地方では車で走れる渚など夢のような憧れでした。憧れのドライブウエイはアツという間に通過しました。味わったのは時の経過でしょうか？観光地の格差なのでしょうか？金沢や和倉などは人が溢れ高級化しているのに周辺の羽咋、輪島などは少しづつ衰退している、そんな感じでした。震災の後放置された集落があったとか、総持寺も前と比べて若干寂れた気がしました。なお、この紀行記の日蓮宗の北陸本山妙成寺のスナツプは五重の塔が一番美しく見える場所で撮られた



妙成寺遠景

りでの大野紀子さんの司会ぶりが爽やかだったことが目に浮かびます。大河ドラマでも取り上げられましたが、『山内一豊の妻はどこで生まれたか？』誰にも認められる勉強家の高橋義一さんはNHKにも一目置かせました。その信念というか、老人力には頭が下がります。

◇鎌倉への旅

平成一八年春の一泊旅行は三溪園と鎌倉の社寺の研修でした。数年前から私は「芸術のパトロン」に興味を持ちはじめ、美術館をつくら私には「芸術のパトロン」に興味を持ちはじめ、美術館をつくら

れました。河合俊次先生も九〇歳を期に、町民大学、生涯学習の講師を引退されました。私が保護協会の会員になるきっかけになった先生です。フィールドミュージアムの創立には多大に貢献されたとか。この『文化財やまと』でも数々の寄稿をなされております。滋賀向源寺の十一面観音が一番のご推奨で何度も実物を見させていただきました。『やまと』初期の頃、珍しく陶器についての寄稿がありました。また奥様芳江さんの俳句や感想文も載せられております。若かりし頃お二人には熱烈な口マンズがあつたとか？先生には長生きして欲しいと思います。

◇信濃路の旅

平成一九年春は私が初めて文化財の旅行に参加した一四年と同じ信濃路に決まりました。会員の高齢化が原因で参加メンバーが集まりにくくなり始め、会員の増加が要望され始めたころです。結果的に滝日準一さんが滝日一正さんに役員が代わるきっかけになりました。

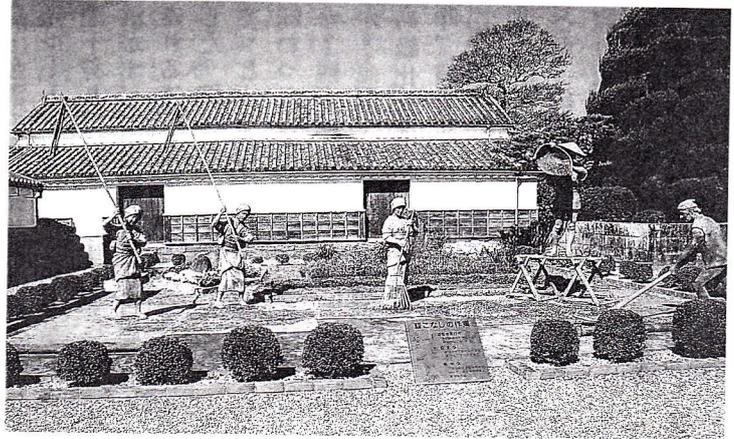
中津川市の女夫岩、奈良井宿の木造大橋、川中島古戦場跡地、戸隠神社、春日山城跡の順に回りましたが上山田温泉近くの智識寺の秘仏十一面観音、教育委

員職員の説明でした。住職募集中とのことでした。お寺の衰退は檀家の減少だけでなく住職も減るのです。

能登へ行ったときのガイドさんが外国人が推す日本庭園ナンバーワンは？との問い。答えは『足立美術館』でした。その頃から狙っていた美術館でした。私にとって文化財 ナンバーワンの旅行はこの二〇年春の松江観光です。大満足でしたが、私にはもっと時間が欲しかった。でも団体行動では時間の配分も致し方ないでしょう。趣味には、人の好みの濃淡によって価値観も変わります。『足立美術館』は、もう一度行きたいところの第二号になりました。

年をとってくると『生病老死』を視つめることが多くなります。疎遠にしていた親友の不調を知らされ動揺させられました。年をとる変化に体調の不具合と、精神的な変化も見逃せません。頑固になる事には気を付けておられますが、文案をまとめる能力も落ちるらしい。二〇年春の松江旅行記は締めきりに間に合いませんでした。

◆徳島への旅
二一年度春は山田真人さんのご努力もあって初めて四国に渡



徳島藍染会館

名、この年の徳島が二三名と参加人員の減少はショックでした。この年の秋京都大蓮寺法然院が三九名、翌年春の白浜吉野山は三一名と新部長の滝日一正さん頑張っております。今年二三年春は大原美術館を目指しましたが、東北大震災による中止と決まりホツとしていの方が多いのが実情でしょう。ですが私には、四〇年の倍、八〇年前に大原孫三郎氏によって日本で初めて創設された美術館に行きたい気持ちは益々募ってきます。

りました。ロボットのような第九交響曲の人形のドイツ館、作業人を銅像にしてある藍染め館、五階建てのビルになっている阿波おどり会館等私たちを楽しませてくれましたが、鳴門海峡と渦潮の自然の景観にはかなわなかったように思います。会員外で参加していただいた渡辺さんがビデオを回しながら歌った郡上おどり「かわさき」が最高だったとの女将さんの感想に、改めて渡辺さんを見直しました。でも前年の松江が三三

れるものがあります。私も告別式に参列させていただきましたが元会長のお人柄が偲ばれるような式でした。

同じ年の春、現会長の佐藤さんは郡上市文化財保護協議会の会長も引き受けられました。

佐藤とき子さんからの順番なんだと本人は涼しい顔ですが、交際も広がるし、いわゆる雑用も増えるでしょう。我々は会長応援もかねて協議会幹旋の行事にも積極的な参加に勤め、一年は寒水の掛踊り、昨年は和良戸隠神社の祭礼を見物させていただきました。祭礼は稚児行列を兼ねた神楽の競い合い、掛踊りは八幡や大和と比べ地域によって違いはあるのですが、私には同じように見えました。どちらも派手な衣装ですが毎年続けられなくなったのは致し方ないことでしょう。

大和町文化財保護協会は、記念の年ごとに特別事業で会の発展に努めてきましたが、今年は四〇周年。昨年は前段階として役員の方内文化財視察、研修を実施、併せて標識の立て替えに力を入れました。

応徳寺、カワシンジュガイ、細川家のヒイラギ等一七本ほどでした。

残念な結果もありました。下劍の鶴来医院、建築物保存について文化財保護協会に検討を依頼されましたが、結果は保存見送りに決まりました。患者の往診に回るのにちよつとしたおかずを手土産にしたり、地元の大和中学校に匿名の育英資金を寄付されたと噂される渋谷医師は、慶應義塾出身の内科医で病は症状そのものよりも心の中から直さなければならぬと、かなり一徹なところもありました。八幡の林医院のように環境と条件に恵まれていれば保存できるでしょうが、壊されるのも致し方ないでしょう」と関係者の感想です。

二三年三月一日、この日から三か月経ちましたが、東北被災地の復興はほとんど進んでおりません。菅さんはいつ辞めるのでしょうか？ 岩手県田老町の国民宿舎『三王閣』はなくなつてしまったらしいのですが、長い岸壁の石段を降りて拾ってきた岩は、東京世田谷のNTT寮から、千葉県習志野のNTT宿舎4階のベランダを経由して、現在は大和町の里山のわが家の庭に置かれています。私が復興した東北を再び見ることが出来るでしょうか？

協会発足

40周年によせて

加藤 一男

大和町文化財保護協会が生まれてから四十年、月日の経つのは早いものです。協会設立にあたり、日夜苦勞された野田直治さんや皆さんにまず敬意を表します。

今日、大和町が日本に誇る古今伝授の里になったのも、本会の先輩達の努力が原動力となったものと思われまします。

私は、この七月で九十四歳になりますが、おかげさまで健康に恵まれ、会の行事には大概参加できて幸せでした。その上、昭和六十年に建設された大和町歴史

民族資料館に三年余り勤務して、一層文化財に興味を覚えました。

資料館と言えば、東胤ななたけ駿さんにも何度もお会いし、お話を聞くことができ光栄でした。小藩とはいえ、いかようにも東氏二十七代の元藩主、時の流れをつくづく感じました。

さて、かかる立派な協会を受け継いだ私たちは誇りとともに責任も重大です。とかく文化財保護なんていうと、何か堅苦しいような、難しいような感じを与えますので、もっと気楽に、そして若い人たちにも参加してもらえらるような良い知恵が出ないか、この機会にみんなで考えましよう。

観光考古学

金子 徳彦

先ほど、(財)日本国際協力センターの招きでカンボジア・ラオスなどメコン五カ国から中央省庁関係者ら二十数名がフィールドドミュージアムを訪れた。目的は「文化財を活用した観光

促進」の研修である。事前に「観光考古学—日本の遺跡の活用と観光を考える—」という平成十七年に東京で開かれたシンポジウム記録集を送っていただいた。このシンポにおいて文化庁記念物課の小野健吉調査官は、遺跡整備の要点は「壊さない」、「嘘をつかない」、そして「寂れさせない」の三つ。歴史的な外観、内包されている歴史的情報、景観の優秀性などを備えた資質の高い遺跡は訪問者にとって魅力的な非日常性であり大きな観光資源、そこには戦略的な整備や運営が求められる、と発表。そのモデル的事例は品格のある観光地として東氏館跡庭園と古今伝授の里を紹介してくださった。単に施設の整備に留まらず、能や文楽、野外コンサートや美術展などさまざまなソフト事業の展開にも注目されている。

東氏館跡が発見されて三十年余。我が古里唯一無二ともいう



べき東氏に関わる一連の文化財、そしてそこを取り巻く美しい風景。その活用が、こうして世界にも紹介されていく。何よりもこれまで、それらをきちんと守り、育ててくれた先達に感謝したいと思う。

何も知らなくて

会員に

遠藤 富貴子

大和町内の文化財巡りをし、区民の関心の高い地区はとも管理が良くて、本当に良いことだと思えました。

会員になって印象深かったことは毎年連れて行っていただく研修旅行などいろいろ思い出があります。中でも、昨年町内の文化財巡りをした時は多くの良いものに出会えたことでした。会員になっていて良かったことは、研修旅行に行くときいつも資料をいただけることでした。私は文化財のことを何も知らなくて会員になりましたが、昨年町内の文化財巡りをしたとき、たくさん良い物があることを知りました。町民の多くの人は、自分の近くにあるものはある程度知っていても、多くの物は知らないのじゃないかと思えます。町民祭の折などに、町民の

方は「くじ」などの時間待ちをしたりしているので、映像で文化財を紹介するような取り組みも大切なことだと思います。また、町民の方にバス代や弁当を負担していただいて、会員が案内をしたりできれば良いと思えます。

小さな旅が

大きな物語へ

佐尾 チドリ

文化財の研修の旅で、これまでに京都、奈良、北陸方面等で神社・仏閣・史跡など、由緒ある地をどれだけ多く訪れたことか。参拝、見学することで、私は古き良き時代の日本の文学の面影をたどって来たように思います。

何年か前、源氏物語千年紀に



ちなみ、紫式部ゆかりの石山寺に参拝する機会を得ました。

平安時代、式部がこの物語の構想を練ったと言われる源氏の間を目の前にして、思いがけない想像をかきたてられました。

それは、学生時代教科書で興味を持ち、その後映画を見たり、図書館や博物館巡りをしたり、原本にも読んでみたけど、しどろもどろで読むのは無理だった経験があるのに、この旅をきっかけに、物語にはまってしまいました。

その頃、瀬戸内寂聴さんの訳も出版されていて、最も読みやすい現代版として、大ベストセラーでブームになっていました。それは、千年という時を経

て、なお私たちの心をゆさぶりとらえるという、この古典文学の魅力が私なりに分かるような気がしました。

この物語のあらずじ、登場人物はともかく、作品の内容は五四帳からなる途方もなく長編で、その流れの中、光源氏を中心に錯綜する大勢の貴族達の心情、愛であったり、悲哀、安らぎ、懊悩、憎悪の展開には誰しも引き込まれてしまう。

この女流文学者式部とは、父は藤原為時で、漢詩文士であり、幼い頃から影響が大きかったようである。適齢期に父親くらしいの年上の人と結婚し、一人子を授かるが夫に先立たれて、その後、時の権力者藤原道長によつて、一条天皇の中宮彰子に仕えたとのこと。式部の物語はここから始まったといわれる。

だから物語をとりまく貴族社会を浮きばりに描くことができただと思う。紫式部の名は父の官位で、式部丞に由来し、物語中の紫の上になみ紫式部となった。性格はプライド高く内向的で、人に自分を悟られないとする反面、じっくり人を観察する才能は抜群であり、当時、清少納言や和泉式部の歌人も同

時代だとか。

千年もの昔、このような傑作を書き上げた作者はどこにも存在しないと、海外では、「華麗にくり広げられている王朝絵巻」と絶賛されてきた。けれど、王朝絵巻そのものでなく、見事なフィクション物語と断言される永井路子さんのエッセイのなかで、式部はノンフィクション作家でも歴史小説かでもないことを、さらに光源氏が栄華の頂点を極めたときに造る六条院も架空の館であり、当時の貴族は愛人と共に生活する人は一人もなく、あり得ないと。そんな情景を描き抜いた風俗全般にわたる精緻な表現は式部の学識に裏づけられるものである。ただ、甘美な王朝絵巻ではなく、愛とははかないもの、うつろいやすいもの、そして、人はいかに苦



しめられるのか、などの思想の深さ。これこそ無常の思いの文学化なのだとまとめて、この物語は「虚構の美学」と評価されている。すべて創作にしろ、リアルに伝わるのは訳されている寂聴さんの現代感覚に沿う豊かな表現であろうか。

この物語を多くの人に読んでほしいと訳された寂聴さんは少女時代に、人妻になつてから、なお年をとつてからでも読むたびに色々な読み方ができるから、その時代ごとに感動的で登場人物が多様、性格も色々。それを現代の身近な人に重ね合わせる事ができると。読者を飽きさせない魅力はこの辺りにあるのだと思う。

源氏物語については訳者も他にあり、色々な説もあるのは、この作品が価値観の高いものだからこそと思う。広大な世界を長編で描きあげる想像力のたくましさとエネルギーに、やっぱ天才の技と、ただただ脱帽しかない。

小さな旅を楽しみ、さらに文学へと二重に楽しめたのは事実でした。



大和の文化財は 先駆者によつて 守られた

田口 勇治

私は家の辺りにある三基の千人塚のもとで暮らしている。二基は天文九年・十年に越前朝倉勢の篠脇城来攻の折の墳墓とのこと。残りの一基は木蛇寺縁故の丘陵と聞いている。

この千人塚は、昭和五十年代の圃場整備事業計画の区域に入っていたが、地元の心ある有志達の熱意によつて、かろうじて残されることになった。現在は、文化財に指定されていないが、篠脇文化財顕彰会の標柱が立っている。同じ集落の中で、東林寺跡からは礎石が出てきたと後から聞いたが、残念ながら計画通り圃場整備化されて跡形もない。

なお、東林寺跡から出土したとされる懸仏六体和和鏡二面は、文化財として栗巢の応徳寺に保管され、本年協会40周年記念事業の一環として、新しく標柱が立てられる事となった。

東林寺跡の件に関して、前会

長の土松新逸先生は痛恨の極みと言っておられた。その強い思いが、その後の東氏館跡庭園の示唆と発見につながったと記憶している。

昭和五十四年頃、土松先生は自転車で毎日のように徳永の自宅から篠脇城下へ出かけられていた。折しも城下山麓の圃場整備工事のただ中であつた。先生の子測どおり、礎石や陶片が出土し、工事は中断され、本格的な発掘調査が三年間実施された。なかでも、天目茶碗や木簡が出土したときの先生の喜び様は、今でも目に浮かぶようである。

当時はだいぶ御高齢に感じていたので、「先生のバイタリティはどこから生まれるのか」と失礼な質問をしたことがある。先生曰く「何事にも恋いをすることだ」とのこと、なるほどと感心したことであつた。

その後、東氏館跡庭園は室町時代中期を代表する池泉観賞式庭園として、国名勝の指定を受けることとなった。

本年度、大和町文化財保護協会は創立四〇周年を迎える。初代野田会長以来多くの先生方の献身的なお働きとご努力の賜で

ある。

現会長佐藤光一先生は郡上市文化財協議会の会長を兼務しながら、東家文書に注釈、解説を加えて永久に保存すべく、デジタル化に取り組んでおられる。これまた、気の遠くなるような事業であり、お志に感銘を新にするものである。

願わくば、こうした文化財が末永く市民に愛され、守られていくことを祈るばかりである。また、子供達や若者達に文化財のすばらしさ、貴重さをどのように伝えていこうかが、これからの協会の大きな課題の一つとらえている。



それでも旅行を 楽しみに

旗 清子

会員でいながら旅行しか興味が無く、文化財保護協会としての自覚が欠けております。

保護協会が計画してくださる旅行は、訪れたことのない所ばかりで、とても有意義で、他所の文化財に心から触れることができます。後から思い出しても、

良いところへ連れて行ってくださったなあと、感謝の気持ちで一杯です。

このように好きな研修旅行ですが、最近、今年十一月に九〇歳になる母の介護でどこへも出かけられなくなりました。昨年二度入院し、それからは万場の私の家で面倒を見ておりました。それまでは白鳥で和裁をして元気で一人暮らしをしておりました。そして、一月に雪ですべて転び、また入院し、三月末に退院しましたが寝てばかりの毎日です。

一番下の妹が家を継いでおりますが、義弟が定年になり、これからという時になって足がしびれ、痛くなり、歩くのもやっとなという状態になりました。昨年、名古屋の病院で五月と七月に手術をしました。まだリハビリ状態なので妹も泊まり込みで

世話をしており、なかなか帰ることができません。母も入院しからは食事もおスプーン二杯くらいしか食べないので、三度三度口へ運んでおります。四八キロあった体重も三六キロに減つてしまい、脂肪は全てエネルギーに変わって、命を支えているのかなと思っております。

妹夫婦が元気で帰ってくるまで、母の命を守ろうと、怒ったり、おどしたりしながら食べさせています。あんなにきついことを言わなければよかったと後悔して、泣けると思いながら、食べて生きるといふことがこんなに難しいことなのかと思ひ知らされます。

このような毎日を過ごしておりますが、いつの日か友達と文化財保護協会の研修旅行にいくことを楽しみに、頑張ろうと思っております。



子供達に送る 切子灯籠

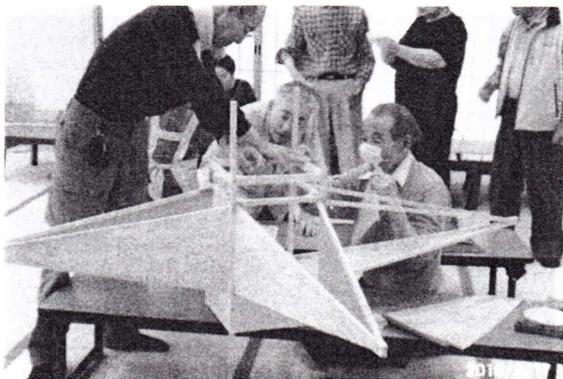
山内孝一

五月二十日、ご縁を得て、親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に

お詣りさせていただいた。盛大な法要もさることながら、帰りのバスの出発時間までの自由時間に、現在は阿弥陀堂にかけられた足場の、二階、三階を歩きながら、新装なった御影堂、これから修復に着手する阿弥陀堂を、近くからゆつくりと見学させてもらった。

毎年、当協会が実地される研修旅行に同道させてもらって、つくづく思うことではあるが、先人達の知恵の深さ、技術の素晴らしさ、精魂を打ち込んだその心意気等に想いをいたし、つくづく頭の下がるおもいであつた。

考えてみれば、私たちの身近



には、忘れ去られてはいかにも残念に思える有形、無形の文化財的なものがいくつか存在する。たとえば、郡上各地に伝わる豊年祭りの神楽、嘉喜踊り、あるいはお盆の切子灯籠などである。これらは時代の流れと共に継続が危ぶまれている。なかには保存会が結成されているところもあって、頼もしい限りである。

ちなみに、私たちの自治会では、子供達のための「夏祭り」を行っており、シニアクラブも二、三年前から協賛し参加してきた。昨年は子供達に「想いで」をと切子灯籠の作成に挑戦した。すべて無からの出発であり、大変だったが、どうにか完成することができ、達成感を味わうことのできたのは大きな収穫であった。

夏祭りの後は、公民館の玄關ロビーに保管しており、今年も夏祭りには広場に吊って盆踊りが行われることであろう。

子供達の脳裏に残る「切子の下で踊った」その追憶を通して、長く受け継がれてきたかような文化財的なものに、少しでも関心を持ってもらえるならば望外の喜びである。

なお、主として郡上北部に伝えられてきた切子灯籠がいつの時代に、どこから入って来たものか、その由来、来歴などご存知の方がおられたら、ぜひ御教示いただきたいと願っております。



会員になって

よかったこと

井 俣 初 枝

私は、早くから会員に入れていただきました。今は故人となられた諸先生方や先輩の皆さまのおかげと感謝しております。また、家族の理解も大切なことでした。

◇ふる里散歩

平成四年十月、佐藤とき子先生のふる里散歩第一回が始まり、薬師平、河辺古墳、福田古墳とバスで廻っていただきました。

大和町の歴史は一通り聞いてはいたけれども、先生の軽妙な語り口は笑いを誘い、人を引きつける何かを持っておられ、また、貴重な資料もたくさんいた

できました。先生は三年間このふる里散歩を続けられました。大和町の歴史、郡上の歴史も勉強でき、民俗学の柳田国男の「遠野物語」の世界に引き込まれそうな心にもなりました。「よかった」、参加された方達の声でした。身近なところに歴史や文化財がいっぱいあることに気がつかせていただきました。

◇常縁さんのふる里探訪

平成五年一〇月十九日から二十一日まで東庄町を訪問させていただきましたことです。常縁さんのふる里探訪です。東庄町の郷土史研究会の皆さんのお出迎えを受け、東氏ゆかりの居城址・神社・寺とご案内していただき

ました。何しろ私は初めてなので、聞き漏らしては大変だと一生懸命でした。

大和町でも有名なあの「古今伝授」のわが町と東庄が歴史・文化で深いつながりがあるということに深い感銘を受けたことでした。

東大社では東氏の末裔東保胤（とうやすたね）様がお見送りしてくださいました。念願かなって東氏のふる里、史跡探訪を終えることができました。

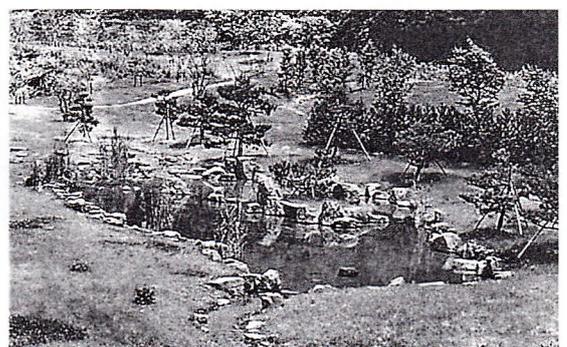
◇戦国時代の名園探訪

福井県の栄華をきわめた一乗谷朝倉氏庭園、三重県の北畠氏館跡庭園、岐阜県わが大和町の東氏館跡庭園など、中世の武将庭園を訪ねられたこと。

人間が自然をモチーフにして創りだした空間の芸術にやすらぎと、一時の静寂のなかにその土地の風土と歴史を感じました。

三重県から奈良県へ入り、春を告げるお水取りに出合うことができました。

奈良はいつ来てもよい、何度でも訪れてみたい場所です。日本人の心の原点である仏教を広めてくださった聖徳太子のおい



(国名勝) 東氏館跡庭園

でたところだから。誰もがすぐ頭に浮かぶのが「一七条憲法」です。「和をもって貴しとし」で始まる言葉です。茶道では柳で結び輪を飾るけれど、これも原点は太子の和からきたものだと私なりに解釈しています。

経本には三帰依文が最初に書いてあります。私たちは聞法の前に必ず三帰依文をと念えます。仏法僧と。太子が初めて摂政をおこなわれたこの三宝を興隆することであったのだということもふる里散歩や郷土史勉強会、文化財保護協会で学ばせていただいたことです。欲を言え、修学院と桂離宮へ行きたいと思っっています。

長浜別院大通寺と

小浜国宝めぐり

研修部部长 瀧 日 一 正

紅葉前線が野山を染めた十一月十八日、秋の日帰り研修を行った。今回は、長浜市と小浜市を訪れて四か寺の参拝と文化財の視察を行った。

長浜市は、琵琶湖の北に位置する地方文化と商業の中心地で、豊臣秀吉が城を開いた城下町とされる。長浜城は、大坂の戦いで山内一豊の拠点でもあったとされ、大河ドラマ「姫達の戦国」の舞台に予定されて整備中とのこと。浜ちりめん、カヤ、ビロードが主な産業。大手門通りは歴史的な黒壁建築の建物が連なり、コクのある重みと落ちつきある街並みであった。

小浜市は、小浜湾入り江の静かな港町で、シルクロードの玄関口として栄えたとのこと。豪商が取り入れた若狭漆塗りが有名、伝統工芸品としてのハシブくりは全国生産の八割を占めるとのこと。大陸からの文化遺産が多く「海のある奈良」と表現

され、奈良にも引けを取らない「国宝の宝庫」とされている。

大通寺の拝観

東本願寺を本山と仰ぐ真宗大

谷派の寺院とのこと。住職の案内で、本堂、山門、玄関、梵鐘、大広間、書院、蘭亭、含山軒、庭園などを見学した。大通寺の成り立ちには、信長が石山本願寺を軍事的要塞と大阪の商業交通の要として眼をつけ、本願寺撃滅作戦に着手した。本願寺一世願如上人は雑賀



衆(さいかしゅう)をはじめ諸国の門徒を率いて信長と戦った。世に「石山合戦」と言われている。

信長が没したあと、秀吉が本願寺を保護して再興し、後の家康は京都七条烏丸に寺領を寄進し、東本願寺を建てたとのこと。

大通寺と本願寺の結びつきは、初代の住職を東本願寺から迎えており、彦根藩と代々の姻戚関係で成り立っているとのこと。

とであった。

建物が伏見城の遺構とされる所以は、江戸時代初期、本願寺で不要となった建物を貰って建てたとのこと。普通の寺との違いは、本堂の柱が全部まき木で、角柱となっている。細かな傷跡がありこれは賽銭のぶつかった跡とのこと。当時の勢いが伺われる。欄間は、唐草模様ポタンの単調なもの、孔雀、リス、鹿、牡丹等、非常に変わった彫り物で、色石を砕いて色づけしたもので、四百年経過した今日も、色鮮やかな、贅沢な作りとなっている。

山門は、巨大な二層門で、三十二年間掛けて築いたとされ大変な苦難が伺われる。大広間には、武者隠しの部屋があり、袋戸棚、筆がえし、金箔の大きさ(十二cm)、柱の面取りの形状などから安土桃山時代の建物とのことであった。梵鐘は、南北朝時代(一三六三年)の日本では一番古いとのこと。

書院は、ふすま絵を意識して柱の位置を定め、十二面のふすまに描かれた金地墨画梅の図は豪華絢爛たるもので、各部屋の障壁画、襖絵など全てが圧巻であった。随所に城の建物であったことを目の当たりにして、時

の権力のなせる技と仏教文化を併せ持つ、大変立派なお寺であることを知り、大きな驚きと感動を覚えたひと時となった。

羽賀寺の拝観

羽賀寺では、七世紀の女性天皇の御影とされる十一面観音菩薩立像を拝観した。像高一四六cm、腕が長く不思議な像形であるが、十世紀に、一本の檜で作製されている。彩色は、たいしや色、緑、朱が用いられている。下地が五、六を越える厚さのため造立当初の彩色はほぼ完全に残るとのことであるが、当時の色彩を忠実に残す、色鮮やかで美しい菩薩像であった。

多田寺の拝観

秀吉が、鐘をたたいて一生お金に困らなかつたとの言い伝えから、この寺で鐘を打つと一生お金に困らないとのことである。埼玉から嫁いだ、話好きなおばあちゃん(坊守)の出迎えるを受けて、梵鐘の打ち方と祈願方法を習い、諸仏のいわれを聞くことになった。

中央に薬師如来立像、その右左に日光菩薩と月光菩薩が祀られ、この三体が重要文化財とされている。薬師如来で壺を持つ

ていないのは寺だけとのこと、十一面観音菩薩は、密教の伝来以前からのものとされ極めて貴重な遺品とされている。しゅみ種は日光東照宮と同じ造りの登り竜造りとなっている。

当寺薬師如来の慈悲によって、孝謙天皇病気が良くなったため、国の仏の扉があき、当寺が立派なつたとのこと。一銭も無い貧乏寺を十三年間の托鉢で立て直した。坊守の諸仏管理の苦勞を苦としない仏心と、あわせもつ商魂たくまじさに感心して寺を後にした。



多田寺の鐘楼

明通寺の拝観

明通寺は、西暦八〇六年に創建とのこと。以後四〇〇年間に三回の火災に遭い一二七〇年に全てが再建したとのことである。本堂は、鎌倉時代のもので、

余計な飾りも裝飾もない、質実剛健でがっちりしたものであった。

この寺の本尊は薬師如来で、本堂と三重塔が国宝とされている。

薬師如来は九五〇年に、檜の大木で作られたものとされている。手に持つ壺には病気を治す八万四千の名薬が入っているとされ、天下万民の病を治す祈願所として信仰が厚いとのことである。三重塔は阿弥陀三尊と釈迦三尊が祀られており、建物は細工が非常に細やかで重厚なものであった。

大きな感動を覚えた一日

当地の「弁当忘れても、笠忘れるな」のことわざどおり、一時、急な雨にたたられました。知らない土地を旅すると思いがけない知識を得ます。今回は、各寺の御住職に、丁寧な案内と細かな説明を頂いた研修旅行となりました。文化財に無関心な私にとって、大きな感動を覚えた一日になりました。今後も機会あるごとに参加し見聞を広めたいと思います。総勢二十八名の参加者を得て、研修旅行を無事終わることができましたことを深く感謝を申し上げます。

文化財保護活動にぜひご参加ください

～あなたのご入会とお力添えを挙げてお待ちしております～

本誌「文化財やまと」第36号所載の会員名簿にあります理事・役員までお申し出ください。年会費2,000円（家族会員は1,000円）を収めていただければ、いつでも入会できます。

大和町文化財保護協会の活動

大和町には、郡上市内で、人が使った最古の石器「落部中屋出土有舌尖頭器（おちべなかやしゅつど・ゆうぜつせんとうき）」をはじめ、「福田古墳・丸山古墳の出土品」そのほか、市内のほかの地区にはないものを含む貴重な文化財が134件あります。

これは、大和町文化財保護協会が昭和56年7月創設以来40年間、地道に、一度失われたら取り戻せない、先人たちの残した貴重な文化財を発掘し、保護し、後世に伝えるために努力してきた成果だと自負しております。

私たちは、創立40周年記念事業の他に、平素次の活動をしております。

- ① 文化財の所在を周知し、異常が生じたときはすぐ対処します。
- ② 文化財の所在を示す標柱・案内板などを充実させています。
- ③ 機関紙「文化財やまと」を発行して、町内文化財への理解を深め、会の活動の様子を内外に知らせています。
- ④ 年2回各地の文化財見学・研修の旅行をし、会員の文化財への理解を深めるとともに相互の親睦をはかっております。

なお、要望があれば、いつでも、何処へでも、町内の文化財の解説・説明に出かけます。

文芸欄

短歌

古今橋

渡邊千恵

〈古今橋〉渡りて辿る常緑と妙椿の歌碑
こけ光らしむ

戦乱の代にありてなお城山を返還せしめし
和歌の功徳は

在りし日に一城自在のパフォーマンス鑑
背な男よ喬藤妙椿

むらぎもの心伝える庭園の
池の辺に杜若咲く

〈三日坂〉今に伝えて立札に結界のあり
ここ〈三日坂〉

川原の風景

井俣初枝

夢の中 タイム・スリップの旅をして
吉兵衛清水のひやし瓜はむ

ほきはきと枯れ葦踏みて川原に
彫刻のごと鷺の直立

枯れ葦のすさぶ川原におり立ちて
土に汚れし地下足袋あらう

夏草はほどほどにして刈り残す
共に生きよう虫の樂園

青あおと若菜育ちし畑のもの
今朝は真白き霜おきそめぬ

杭を打つ

桑田和子

夜は痛む腕など忘れ花つけて
倒れしささげの杭打ち直す

堀たてのじやがいのもぼこぼこ陽の味を
送る荷物をいそいそ作る

手間換えて田を打ち合った祖母達の
汗の沁み入る泥の光りぬ

ふる里の秋を抱いて帰るなり
鞆にのぞく山栗の毬

枯菊のけむりは天へ灰は地へ
それぞれ地球に返して清し

俳句

芝桜

寛明代

燕の巣 預かる如く 世話のやけ
落日の 色にも染まらず 咲く桜

鎌だけを 忘れて帰る 初かわず

奥山に 婆ははが残せし 芝桜

大根蒔 夫は生き生き 畑に行く

彼岸僧

遠藤富喜子

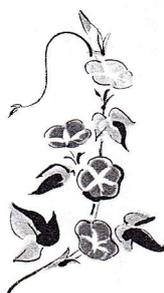
経本のページあたらし彼岸僧

雨まじり頬うち濡らす涅槃西風

母の留守乳欲せる嬰に日は長し

吹き上げる風吹き止まず山の藤

満開や白雲とどめ牡丹園



平成22年度 事業報告書

四月八日(木)～九(金)

平成二二年度宿泊研修(参加者三二名)

探訪地：第一日、紀三井寺、道成寺参詣・見学(宿泊白浜)

第二日、金峰山寺参詣、吉野山センボンザクラ散策

二〇日(月) 第一回郡上市文化財保護協議会理事会、「文化財くじょう」配布
「文化財やまと」編集委員会 原稿依頼その他

五月二六日(日)
六月三日(木)

第一回執行部会(新年度への取り組み)

平成二二年度会務・決算報告について、平成二二年度事業計画・予算案について、平成二二年度総会について、会費徴収について

一五日(火)
二五日(金)

平成二二年度総会(出席二二名)

①平成二二年度会務・決算報告

②平成二二年度事業・予算の承認

会報「文化財やまと」発刊(発行部数三〇〇部)

講話：講師：フィールドミュージアム所長 金子徳彦氏

題目：「古今伝授の里づくり二〇年の歩み」

東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃(剣上地区参加)

七日祭・薪能

第二回執行部会

研修部会(秋季日帰り研修について)

二二日(火) 第二回役員会(郡上市協議会諸行事への参加について)

役員会(町内文化財視察)

二九日(水)～三〇日(木)

郡上市文化財保護協議会「秋の文化財探訪」長野方面(中止)

第三回役員会

①平成二二年度秋季日帰り研修の計画・実施について

②その他

一〇日(日) 郡上市文化財保護協議会市内文化財めぐり「和良町戸隠神社祭礼」

見学(参加者一五名)

平成二二年度秋の日帰り研修

(長浜大通寺、小浜明通寺ほか、参加者二八名)

第三回執行部会

第四回役員会、事業・会計中間報告、引き続き

郡上郷土史研究会と合同にて講演会、懇親会

研修部会(平成二二年度春期一泊研修計画)

役員会(平成二二年度春期一泊研修、新年度の諸計画について)

郡上市文化財保護協議会第二回理事会

二月一〇日(木)
三月八日(火)
一四日(月)

平成23年度 事業計画(案)

四月二〇日(水)
二三日(土)

第一回郡上市文化財保護協議会理事会(二二年度諸計画)

第一回執行部会(新年度への取り組み)、平成二二年度会務・決算報告について

平成二二年度事業計画・予算案について、四〇周年記念事業について

五月一六日(月) 会員拡大について、平成二二年度総会について、「文化財やまと」編集委員会 原稿依頼その他

第一回役員会

平成二二年度会務・決算報告について、平成二二年度事業計画・

予算案について、規約の一部改正について、

四〇周年記念事業について、会員拡大について、

平成二二年度総会について、会費徴収について

県文化財保護協議会総会、四〇周年記念大会(於：岐阜県図書館)

平成二二年度総会

①平成二二年度会務・決算報告、監査報告

②役員改選

③平成二二年度事業・予算の承認

④規約の一部改正について

⑤四〇周年記念事業について

会報「文化財やまと」発刊(発行部数四〇〇部)

講話：佐藤 光一

題目：「郡上藩主金森頼錦の末路」

東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃(剣上地区参加)

七日祭・薪能

第二回執行部会

九月二日(金) 第二回役員会(秋季日帰り研修、郡上市協議会諸行事への参加について)

研修部会(秋季日帰り研修について)

郡上市文化財保護協議会「秋の文化財探訪」

大河ドラマ「江・姫たちの戦国」を訪ねて

第三回役員会

一〇月五日(火) ①平成二二年度秋季日帰り研修の計画・実施について

②その他

二五日(火) 郡上市文化財保護協議会市内文化財めぐり

「高鷲町開拓関係の資料展」見学

秋季日帰り研修

第三回執行部会

二月二一日(金) 第四回役員会、事業・会計中間報告、記念事業発表会の持ち方について、引き続き懇親会

三月八日(火) 研修部会(平成二二年度春期一泊研修計画)

以下未定 第五回役員会(平成二二年度春期一泊研修、新年度の諸計画について)

郡上市文化財保護協議会第二回理事会

会 員 名 簿 (順不同)

平成23年6月現在

■ 剣	
山下 運平 (顧問) 88-2406	
籾 勝美 (顧問) 88-2031	
日置 敏明 (顧問) 88-2254	
村瀬 喜八 88-2128	
河合 俊治 88-2246	
加藤 正恵 88-2107	
加藤 文蔵 88-2802	
佐藤 光一 (会長) 88-3201	
佐藤 八重子 88-3201	
田中 和久 88-2200	
高橋 義一 88-3792	
河合 亘 (理事) 88-2358	
河合 尚 88-2304	
加藤 小弐 88-2329	
森前 とし子 (理事) 88-3479	
岩崎 扶美子 88-3521	
河合 利雄 (副会長) 88-3520	
河合 美弥子 88-3520	
山内 博 88-3886	
山内 悦子 88-3886	
村瀬 方彦 88-2008	
小池 祐二 88-4064	
小池 圭子 88-4064	
林 千里 88-3333	
佐藤 公子 88-2161	
山下 妙子 88-2405	
山田 ひとみ 88-2736	
■大間見	
村井 正蔵 88-2323	
大野 一道 (理事) 88-2230	
大野 紀子 88-2230	
野田 英志 88-2285	
清水 一作 88-3086	
池田 光彦 (理事) 88-3090	
小野江 勉 88-2725	
松井 賢雄 (理事) 88-3991	
藤代 順行 88-3060	
小野木 花子 88-2747	
青木 ユリ子 88-3477	
坪井 由佳子 88-3990	

■万 場	
畑 中 真澄 88-2441	
石 神 堯生 (理事) 88-2413	
稲 葉 和巳 88-2503	
笥 伸雄 88-2532	
笥 明代 88-2532	
黒 岩 弘美 88-2458	
井 俣 初枝 88-2758	
青 地 正男 88-2447	
大 井 正明 (理事) 88-2894	
籾 清子 (理事) 88-4170	
山 田 敬子 88-3917	
大 井 ともゑ 88-2893	
三 輪 孝子 88-2782	
桑 田 守夫 88-2514	
大 中 弘美 88-3506	
大 中 春子 88-3506	
鷺 見 務 88-2651	
鷺 見 三津子 88-2651	
小 倉 義明 88-3224	
小 倉 津由子 88-3224	
桑 田 洋一 88-2414	
桑 田 博 88-2241	
大 中 登志枝 88-3624	
■徳 永	
水 野 志づ子 88-2610	
山 内 孝一 (理事) 88-2616	
遠 藤 賢逸 88-2121	
遠 藤 富貴子 (理事) 88-2121	
渡 辺 千恵 88-3280	
■河 辺	
鷺 見 長子 88-2028	
前 田 鈴 88-3666	
■神 路	
白 田 浄円 88-3461	
白 田 宝徳 88-3730	
羽 生 清 88-2271	
山 田 眞人 (会計) 88-2114	
山 田 正代 88-2114	
山 田 健 88-2689	
山 田 味代子 88-2844	

山 田 敬子 88-2336	
■ 牧	
金 子 政子 88-3426	
滝 日 準一 (監事) 88-2705	
粟 飯原 明子 88-2362	
日 置 貞一 88-2662	
遠 藤 千鶴子 88-3637	
遠 藤 高真 88-2890	
滝 日 敬子 88-3406	
田 口 勇治 (副会長) 88-3950	
加 藤 一男 88-2870	
野 田 嘉明 88-3043	
尾 藤 佐紀子 88-2353	
早 瀬 ふみ子 88-3327	
日 置 清子 88-3636	
齊 藤 武生 88-3922	
滝 日 一正 (理事) 88-3064	
日 置 康夫 88-3788	
金 子 徳彦 88-3063	
■栗 巢	
島 崎 増造 (監事) 88-2236	
増 田 洋子 88-4041	
笥 政之助 (理事) 88-4031	
野 田 恵光 88-4027	
■古 道	
細 川 優 (理事) 88-2861	
清 水 克巳 88-2862	
野 口 喜代子 88-3084	
■名皿部	
有 代 眞一 (理事) 88-3791	
森 下 正則 88-3413	
佐 尾 千ドリ (理事) 88-3544	
■ 島	
森 藤 雅毅 (理事) 88-2684	
山 田 長次 88-3648	
田 中 篤 88-2792	
奥 田 昌明 88-2520	
奥 田 清子 88-2520	
本 川 喜代士 (書記) 88-3833	
本 川 清子 88-3833	

◆◆◆ 平成22年度 決算報告書 ◆◆◆

(収入の部) (単位:円)

項目	決算額	摘要
前年度繰越金	1,922	
会費	216,000	
会員会費	216,000	正会員2,000円×100名 家族会員1,000円×16名
助成金	81,000	郡上市
記念事業積立金	302,053	
その他	32	貯金利息他
合計	601,007	

(支出の部) (単位:円)

項目	決算額	摘要
会議費	13,869	
総会費	6,144	資料費 印刷費 冷房費など
会議費	7,725	印刷費
事業費	501,526	
研修費	173,395	春の宿泊研修(バス代の一部)
研修費	34,941	秋の日帰り研修(バス代の一部)
会報発行費	50,400	350部(『文化財やまと』)
奉仕活動費	21,960	燃料代 傷害保険など
文化財標識調査費	4,600	行事部
文化財標柱費	192,500	応徳寺・白雲山・松尾城 カワシジュガイ 細川家ヒイラギなど標柱代
郡上市文化財研修費	1,375	和良町戸隠神社例祭
合同研修会費	7,730	郡上歴史研究会との合同研 修会 講演料など
理事研修会	14,625	大和町内文化財研修: 参加者13名 弁当13,000 茶1,625
事務局費	31,652	
消耗品費	29,452	ハガキ 資料送付 コピー 印刷など
記録メディア	1,780	
振り込み手数料	420	
会費負担金	50,000	県:30,000 郡上市:20,000
合計	597,047	

平成22年度の歳入・歳出経理について監査を行った結果、適正に処理されていました。
平成23年 5月16日

監事 島崎増造



滝日準一



◆◆◆ 平成23年度 予算書 ◆◆◆

(収入の部) (単位:円)

項目	予算額	摘要
前年度繰越金	3,960	
会費	216,000	
会員会費	216,000	正会員2,000円×100名 家族会員1,000円×16名
助成金	81,000	郡上市より
記念事業積立金	270,000	
雑収入	40	
合計	571,000	

(支出の部) (単位:円)

項目	予算額	摘要
会議費	45,000	
総会費	25,000	講師謝礼 他
会議費	20,000	理事会 役員会
事業費	420,000	
会報発行費	80,000	500部
奉仕活動費	30,000	文化財清掃奉仕作業燃料代 傷害保険
創立40周年 記念事業	270,000	東家文書デジタル化など
文化財研修	40,000	
事務局費	50,000	
消耗品費	30,000	プリンタインク 印刷用紙 他
通信費	20,000	通信用はがき 他
会費(県市)	50,000	県:30,000 郡上市:20,000
予備費	6,000	
合計	571,000	

収入 601,007 - 支出 597,047 = 3,960円
(3,960円は平成23年度へ繰り越し)

編集後記

▽今年度は大和町文化財保護協会成立四十年となりました。これを機に「文化財やまと」はA4に一新しました。▽私は郡上高校一年の時、担任であり日本史の先生でもあった高牧實先生をスクーターの後ろに乗せ、栗巢の民家の古文書調査に走り回った記憶があります。昭和三十年代の前半、まさに郡上の歴史開明の一端を担っていたんだということの後になって気づきました。▽現会長の佐藤光一先生と初めてお会いしたのも郡上高校一年生の英語の時間でした。今なお親しく、厳しく指導していただいているのも、歴史の宿命を感じます。▽また、大和村史の編纂に関わり、わずか一行の古文書の解読を巡り、二日も三日も激論が続き、その最中に疲れ果てて眠ってしまったことも今は懐かしく思い出されます。時は早く流れ過ぎ、心を潤すものは、さらに速く流れ去ります。今踏ん張らねばと切実に思います。(ま)